

ジョージ・S・クレイソン著『バビロン大富豪の教え』の解説

本書は、ジョージ・S・クレイソン著『バビロンの大富豪』に基づき作成されたものである。原書の『バビロンの大富豪』は、著者がその「はじめに」で記しているように、「富とそれに関わることを理解するための手引き」として最初はパンフレットの形で出版・配布されたものを、後に一書にまとめたものである。したがって、本書は蓄財の指南書であって古代のバビロンの歴史や経済を解説したものではない。本書の時代と場所の設定は、紀元前7世紀頃から紀元前5世紀頃までのバビロンにしているように見受けられるが、ところどころに古代のバビロンではあり得なさそうなことや、アルカドやダバシアのように、古代のバビロニアでは見かけない人名が出てくる。しかし、それらは原書のままにしている。

では、紀元前7世紀頃から5世紀頃までのバビロニアは実際にどのような状況であったのだろうか。以下に極く簡単に説明しておきたい。なお、「アッシリア」はメソポタミア北部をさす地域名あるいはそこに生まれた王国を、また「バビロニア」はメソポタミア南部を指す地域名あるいはそこに生まれた王国を指す。「バビロン」は基本的には都市バビロンを指す。

アッシリア王国とバビロニア王国の歴史

アッシリア王国とバビロニア王国は、言葉（アッカド語）や文字（楔形文字）など同じ文化を共有しながらも政治的には独自の発展を遂げた。両王国が古代のオリエンタル世界に広くその名が知られるようになったのは紀元前14世紀と考えてよい。この時代はアマルナ時代と呼ばれ、アッシリア、バビロニア、ヒッタイト、エジプトなどの王たちが対等の立場で手紙を交換し、交易を行った国際的な時代であった。

その後紀元前12世紀に東地中海沿岸地帯は「海の民」の来寇、また西アジア内陸部では半遊牧民のアラム人の大移動などの他、大飢饉等もあり、西アジア一帯がいわゆる暗黒時代に入った。この「暗黒時代」から最初に抜け出したのが、アッシリア王国であった。そして紀元前8世紀後半以降、アッシリアはユーフラテス川を越えて現在のシリア、レバノン、パレスティナまでも支配下に収める大帝國を築いた。特に、アッシリアのエサルハドン王（在位前680-669年）やその子アッシュルバニパル王（在位前668-627年）は短期間ではあったがエジプトをも支配下におくほどであった。アッシリア帝国は、支配下の諸地方から富と職人や労働者を集めて壮大な都ニネヴェを

築いた。

他方、「暗黒時代」の混乱から立ち直るのが遅れたバビロニアは、アッシリアのティグラト・ピレセル3世（在位前747-745年）以降、アッシリア王がバビロニア王を兼ねるなどあり、アッシリアの支配下に留まることを余儀なくされた。しかし、バビロニアでは、紀元前8世紀の終わり頃からアッシリアに対する独立の機運が高まり、メロダク・バルアダン2世の下で約2年間（在位前721-710年）独自のバビロニア政権が実現した。この政権が崩壊した後もバビロニアでは独立を目指す動きが高まるばかりで、ナボポラッサル（在位625-605年）の下で、現在のイラン北部に興ったメディアア王国と連携してアッシリアの旧都アッシュルや首都ニネヴェを攻略（前612年）、アッシリア帝国を事実上滅亡させた。

ナボポラッサルの次にバビロニア王となったネブカドネザル（2世）（在位前604-562年）は、アッシリアが支配していた地域をほぼそのまま支配下に置き、バビロンに巨大で絢爛たる都を造営、60年余りにわたり王としてバビロニアに君臨した。エルサレムを攻略し（前588/587年）、ユダ王国の住民を大量にバビロンに連行したのも（バビロン捕囚）このネブカドネザル王であった。ネブカドネザルの没後、わずか7年の間に3人の王が立つ混乱期を経て、新バビロニア6代目の王ナボニドス（在位前555-539年）の治世にバビロニアは隣国アケメネス朝ペルシアの支配下に入る。ナボニドスは、バビロンの主神マルドゥクに代えて月神シンを重視したため、バビロン住民の不興を買い、ペルシア王キュロス（バビロニア王としての在位は前538-530年）が、「救世主」として、バビロンに迎え入れられたのであった（紀元前538年）。そんなこともあり、バビロンは、キュロスによる占領後もダレイオス1世（バビロニア王としての在位は前521-486年）の紀元前5世紀なかばころまで社会的、経済的な混乱もなく繁栄を続けることができた。「バビロンの大富豪」の時代的背景として想定されているのは、おそらく新バビロニアのネブカドネツアル（2世）からアケメネス朝ペルシアの王大レイオス1世までの100年余りの時代であると思われる。アテネを中心とするギリシアとペルシアとの間で3回にわたり戦われたペルシア戦争（紀元前500-449年）が始まったのはダレイオス1世の時代で、その費用をまかなうためにクセルクセス1世（バビロニア王としての在位は前485-465年）がバビロニアに課した過酷な税や灌漑施設の荒廃でバビロンは衰退し、最終的に紀元前331年のアレクサンドロス大王による侵攻によってバビロンはその歴史を閉じた。

バビロンの繁栄

紀元前7世紀初めころから5世紀初めころまでの期間に何世代かにわたってバビロニアで活躍した富豪は大勢いたが、その中でも特によく知られているのがエギビ家とムラシユ家である。エギビ家は、紀元前7世紀はじめから5世紀のダレイオス1世（在位前521-486年）の治世まで家屋、耕地、奴隷その他の売買および交換を行った。他に銀行業も営み、預金の預かり、約束手形の発行と受領、顧客の負債の肩代わり、商会の創設やそれへの融資なども行った。なかには役人として王に仕えるものもいた。エギビ家は、国内の交易ばかりでなく、特に比較的平和であった紀元前6世紀の最後の20年間は、外国貿易にも携わった。

ムラシユ家は、アケメネス朝ペルシア時代のアルタクセルクセス1世（前465-424年）からダレイオス2世（前423-405年）の治世に3世代にわたってバビロニア中部及び南部に於ける交易や金融事業に携わって富を蓄えた。また、ペルシア時代に兵士や役人に対するペルシア政府の支払いが現金払いから扶養の耕地の貸与に変更されたため、ムラシユ家は農夫ではないペルシア人兵士や役人に代わってこれらの耕地を一括して借受けて、更に小作に出すなどして利ざやを稼いだ。

バビロニアの貨幣

最初の鑄造貨幣は紀元前640-630年頃に小アジア西端の小国リディヤで鑄造された。アケメネス朝ペルシア時代には打刻金貨ダーリックや銀貨シグロスなどが作られたが、メソポタミアでは打刻貨幣や鑄造貨幣は使用されず、商取引では主に銀が秤量貨幣として使われた。金対銀はおよそ1対133の比率で交換された。労働者の1ヶ月の報酬は銀1シエケル（約8.33グラム）が標準的であった。

バビロニアの奴隷

当時のバビロニアでは、債務の不履行や貧困が原因で自由人が奴隷になった場合が多い。奴隷は、王宮や大神殿の奴隷を除いて、家内奴隷であって、生活も労働も主人と一緒に行った。奴隷から自由人へ、逆に自由人から奴隷への移行もまれではなかった。ムラシユ家の時代には、たとえばムラシユ家の奴隷が主人の代理として耕地の経営にかかわり、契約の際の証人となることもあった。奴隷はバビロニア人が多かった。外国出身の奴隷は、戦争に負けた国の住民が奴隷として連行されてきた場合が多かった。